

(株)ニッスイのサーモン養殖事業開始に係る記者会見について

日 時：令和7年10月31日(金) 13:30 ～ 15:05

場 所：陸前高田市役所 会議室

出席者：(市側) 佐々木市長、石川水産課長、新沼水産課長補佐兼漁港係長、中川水産係長、阿部主事補

(株)ニッスイ側) 金柱漁業養殖推進部長、養殖推進課 藤田氏、御供氏

取材者：NHK、IBC（岩手放送）、めんこいTV、岩手日報社、河北新報社、読売新聞社、東海新報社、毎日新聞社、朝日新聞社、水産新聞社

(株)ニッスイが、広田湾漁業協同組合と連携し、陸前高田沖の海面でサーモンの試験養殖を実施したところ、この10月1日に正式に養殖事業に関する漁業権の免許を受けたことから、(株)ニッスイと陸前高田市が記者会見を行いました。以下、その概要です。

I 佐々木陸前高田市長

陸前高田市長の佐々木拓でございます。

本日は、ニッスイのサーモン養殖事業が新たに免許を受けまして、これから正式な事業が開始されることから、株式会社ニッスイと陸前高田市とで記者会見を行うこととなりました。

よろしくお願いいたします。

このサーモン養殖事業につきましては、後でこれまでの経緯などを私の方から説明いたしますが、今後、陸前高田市の地場産業としても非常に大きな期待を持っている取り組みでございます。

この養殖事業につきましては、近隣の漁業関係者や地元の関係者などにもこの事業についての関心を持っていただいております、50年前のように漁場が汚れるような取り組みなのではないかと心配される方もいたことから、そういった心配にも答えたいと考えております。

この会見内容を知っていただくことによって、市民の皆さんや漁業関係者の方々、関連産業の方々がこのプロジェクトを全面的に応援していただけるようになればと考えております。

本日はよろしくお願いいたします。

まず初めに、ニッスイのサーモン養殖について、2年間の試験養殖を無事終えての、現時点での私の所感です。

漁場環境調査の報告書を配布しておりますが、報告書の要点としましては、この養殖を実施しても、水質が悪化などの悪影響が全くないという報告内容となっております。

また、カタクチイワシを対象とする定置網漁業を行っている方の中で、カタクチイワシがサーモン養殖の生け簀に入るのではないかと、カタクチイワシが定置網に入らなくなるのではないかと、といった心配をされた方がおりましたが、サーモンのお腹の内容物を確認したところ、全くそういった影響が無いというということも、このデータで示されております。

反対意見があった中でも、この養殖事業を免許取得まで漕ぎつけることができましたのは、地元の広田湾漁協の方々や岩手県庁及び大船渡水産振興センター、岩手県水産技術センターの方々に

も調査などについて多大なるご支援をいただけたということで、この場を借りて、改めて感謝を申し上げたいと思います。

陸前高田市といたしましては、今回、ニッスイが広田湾漁協とともに漁業権の免許を受けましたので、正式な企業の事業としてしっかりと支援をして参りたいと思っております。

これから生産量を今の10倍ぐらいに増やすということなので、市といたしましては、地元の漁業者、或いは養殖業者、そして市民の方々にも影響やご意見をしっかりと聞き、必要なときはニッスイの方にお伝えするなどして、これが友好的に、地域産業として発達するように、しっかりと尽力して参りたいと思っております。

次にこれまでの経緯につきまして、ニッスイのサーモン養殖については、市議会でも取り上げられることがあります、どのようにして現在のような状況に至ったかを説明しますと、まだ市長になる前、私が市内各地区で集会を開催した際、ある出席者の方から、「あなたはこれまで水産庁で働いてきたんだから、市長になったら陸前高田の発展のために大手水産会社の社長に会って、いろいろ協力してくれるようお願いして欲しい」というアドバイスを頂きました。

これを受けて、私は大手水産会社がメンバーになっている団体の会長さんをお願いして、「陸前高田市長が、大手の水産会社の社長さんに是非会いたいと言っている旨を伝えて欲しい」という話をしました。

それを受けて、ニッスイに是非お会いしたいとおっしゃっていただき、2023年の5月頃だと思えますけども、お会いしました。

その時にニッスイさんがどんな考えを持っているかについて、私はわかっておりませんでした、当時、養殖を担当していた役員さんや部長さんと会いました。

ニッスイからは、三陸でサーモン養殖を展開したいという話があり、場所としては、大船渡市の越喜来湾や広田湾を考えているが、どこから話し合いを始めたらいいか分からないという状況で、そんな中で私と会うことになりました。

その後、地元に戻り、漁協の関係者と話をした結果、漁協としてもニッスイと一緒にこの養殖を進めようということになりました。

当時、ニッスイは、まずはフィージビリティ・スタディを2〜3年程度行って、そのあとで養殖をするか検討したい、というお話でございました。

私からは、ぜひ今すぐに始めてくださいとお願いしたところ、最初にお話をしてから、3〜4か月で試験に着手していただいたということで、本当に破格な対応していただいたというふうに思っております。

試験養殖を踏まえた今後の方向性ですが、この試験養殖の期間中、何回か現場に伺うことがありました。

その際にまず思ったのは、現場の方々の服装が通常、漁業の現場で見られる作業着ではなく、人気のアウトドアメーカーの作業着を着ているとか、ウェットスーツもすごくおしゃれなものを着ていたりとか、作業用の車両もピックアップトラックなどといった今までの漁業のイメージとはちょっと違う、現場の様子でした。

今、漁業というのは、担い手不足といったものが深刻になっていると言われてますが、やはり陸上の仕事に比べて、労働条件が厳しいといったイメージがあります。

しかし、ニッスイの場合は雇用確保も見据えながら、持続可能な漁業を目指してることがわかりました。

洋上の生け簀も自動給餌機が備えてあったり、網の構造も環境を汚さないようなものになっておりました。

単に、魚を生産する現場が陸前高田にできるということではなく、それ以外にも、これから水産業がより魅力あるものになるには、どうすればいいのかということについてヒントを与えてくれる、先端的な現場だなというふうに思いました。

他の産業、地域等への波及効果についてですが、ニッスイはこの養殖事業を始めてから、市内の加工会社を子会社にされました。

この他にも、三陸の近隣市町にある、加工業者にもこのサーモンを提供するということを伺っております。

加工原料が不足してなかなか水産加工業が困難になってきた中で、こういった大規模に魚が生産されるということは、陸前高田市だけではなくて、三陸の地域全体にも良い影響を与えていると思っております。

また、市内に魚の内臓から医薬品を作っている会社がありますが、こうした企業とも連携ができるのではと思っています。

大槌、大船渡、陸前高田でニッスイがサーモン養殖を行うという状況でございます。

一方で、大槌には、東京大学の大気海洋研究所の大槌沿岸センターがあり、釜石には岩手大学の水産系の施設が、大船渡には、北里大学の研究センターがあります。

気仙沼には東京海洋大学の三陸サテライトがございます。

ぜひ陸前高田にも、こういった大学の機関、研究機関を誘致して、岩手県沿岸南部地域を1つのエリアとしてとらえて、この産業を起爆剤にして、関係産業などを誘致しながら、先端的な場所にできたらいいなと考えております。

実は先週、山形県鶴岡市の慶應大学の研究所が中心となっている産学連携の拠点を訪問しました。

このように一企業が陸前高田だけで完結するのではなくて、三陸の沿岸南部が関連産業、或いは研究分野で連携しながら発展できたらいいなと思っております。

この地域のそういった水産現場を支えるためには、高田高校の海洋システム科のような人材を育成する場をぜひ残してくださいと県に要望しているところです。

地域産業との協調と、海外への展開の必要性ですけれども、40年ほど前に三陸でギンザケ養殖をやったときに、結果的には値段が下がってしまい、岩手は全滅したという経緯があります。

私がニッスイにお願いしてるのは、ニッスイは海外に子会社を多数持ってる会社であり、また、チリでサーモンの養殖もやってる国際企業でもありますので、国際市場に向けて積極的にこのサーモンを展開していただきたいなというふうに思っています。

最後に、三陸地域における今後の展開方向につきましては、この三陸地域、特に岩手沿岸南部は東日本大震災で被害を受けて、これからしっかりと産業を育てて、活性化しなければいけないという時期ですので、新しいこういった産業もしっかりと根付かせて、また、関連産業も発展させて、この地域が今後、「北上川バレー」に負けないぐらいの地域にするために、いろんな方々と連携して取り組んでいきたいというふうに思っております。

II (株)ニッスイ 金柱漁業養殖推進部長

養殖事業では、2027 年度に売上高 1,100 億円、約 7 万トン生産を目標としており、その約 7 割はチリのサーモン事業が占めており、国内サーモンは現在 5%程度ですが、2027 年に 8%、2030 年には 13~15%へ拡大を目指しています。

今後は「安定した養殖事業の確立」と「新たな取り組みによる事業拡大」の両立を図り、養殖技術の高度化・効率化・高付加価値化を進めていく方針であり、養殖の持続可能性を確保するため、人と環境の両方にやさしい「スマート養殖」を推進し、IoT や DX（デジタル変革）を活用により、魚のサイズ・体重・餌の量などをセンサーで正確に把握することで過剰給餌や環境汚染の防止を図ることとしており、既に全漁場で環境モニタリングシステムを導入し、池の周辺 30m、100m、150m、500m まで定点観測して水質変化を確認することで、環境保全に配慮した養殖を実施しています。

ニッスイは 2030 年までに国内サーモン生産 1 万トンを目指しており、そのうち岩手県で 7000 トンを計画しており、大型生け簀と自動給餌機、そして淡水種苗場を導入により、環境に配慮しながら効率的で安定した養殖体制を構築することで計画数値の達成を目指しています。

陸前高田市では、2023 年から広田湾漁協と協力してギンザケ・トラウトサーモンの試験養殖を実施し、2 年間で事業化の見通しを得ました。

2025 年 11 月から本格稼働を開始し、初年度は滝浜漁場と金入漁場の 2 カ所で実施し、約 300 トンの水揚げを予定しています。

2026 年度には直径 50m の大型生け簀を 3 基、最終的に 5 基、導入し、自動給餌システムを沖合に設置する予定であり、現在の 25m 生け簀の約 6 倍の規模となり、日本ではほぼ初的大型生け簀活用によるサーモン養殖となる見込みです。

また、サーモン養殖成功の鍵は「良質な種苗育成」と位置づけ、陸前高田市の気仙川第 3 ふ化場の隣接地を取得し、幼魚育成用の淡水養殖施設を新設しています。

施設には、直径 15m・容量 300 トンの PP 樹脂製生け簀を 10 基設置しており、排水処理設備を完備し、気仙川沿いの安定した地下水を利用することで、夏に育成し、冬に海面生け簀へ移行するサイクルで高品質な稚魚を供給する計画となっています。

陸前高田市の淡水養殖（種苗育成）は、広田湾漁協が行うシロザケのふ化・放流事業と施設を共同利用する形で実施され、5 月~11 月：ニッスイがサーモン種苗育成に利用し、12 月~4 月：広田湾漁協がシロザケ放流事業に利用という形で、民間企業と漁協が季節ごとに施設を共有する「ハイブリッド運用」を行うこととなっており、このような協働モデルは全国でも初の試みとなっております。

以上（質疑応答は省略）